

不空訳経典にあらわれた仏身観の特色——その二——

加藤 精一

問題の所在

不空三藏（Amoghavajra 705—774）は真言密教付法の第六祖であると同時に、羅什・真諦・玄奘三藏と並び称される中唐の代表的翻訳家である。彼の翻訳経典は、大正藏経に収められたもので一六四部にのぼり、その大部分の一四八部が密教経典といわれる。これら不空訳経典を細かく検討してみると、密教の仏身観の上で極めて重要な特色がうかがえるように思う。これを端的に述べれば、不空三藏は、従来の感性的色彩の強いインド密教の仏身観に、大乘仏教の発達した論理を導入して、全く新しい密教の理論づけを試みているのである。こうした努力によつて密教は、インドで派生的に生じた土俗的宗教ではなくなり、むしろ、釈尊以来漸次に発展してきた仏教々理の最先端に位置づけられることになるのである。これを私は「密教の純化」と考えるのであつて、唐の中期における善無畏・一行・金剛智・不空等の純化を第一段階

とすれば、それらを受けた弘法大師空海の努力は第二段階といえる。そして空海に至つて密教の純化は一応完成したと考へてよいのである。今回のレポートは一昨年引き続き、不空三藏の密教純化の努力についてである。

本論

前回は挙げた特色は次の五項目である。^①

- (1) 多仏的仏身観である「一切如来」を五仏にまとめたことを明言する（『理趣釈経』）
- (2) 五智の中、法界体性智の訳語は不空訳経典にしかみられぬ。これは五智思想の体系化につながる。（『三十七尊出生義』ほか四部）
- (3) 唯識教学の四智から発展した五智と、金剛頂経系統の曼荼羅からの五仏を結びつけて「五智は五仏に等し」とした。（『十八会指帰』ほか十一部）
- (4) 大乘仏教における法報応の三身と、自性、受用、変化、

等流の四身を結びつけることによつて人格的法身を理論づけようとしている。(『分別聖位經』ほか四部)

(5) 以上の特色は、すべて、弘法大師空海の仏身觀の重要な基礎になつてゐる。

これに続けて項目を挙げ説明する。

(6) 小乗教・大乘教を超えた新しい教えの教判を打出していること。

『分別聖位經』の序で不空三藏は三つの仏身を挙げてゐる。則ち「如来の變化身(釈尊)」と「報身毘盧遮那(大乘諸教の教主)」及び「自受用仏」である。この「自受用仏」は小乗・大乘とは別の仏身を意味しており、いわば第三の仏身である。そして、『分別聖位經』の本文は、すべて「自受用仏」についての説明なのである。これは、正に、真言密教(不空三藏は真言陀羅尼宗という)の教判を目指しているに他ならぬ。『三十七尊心要』や『三十七尊出生義』にもこれと全同の趣旨がみられる。ただ注意すべきは、不空三藏は、この「自受用身」なる仏身を直ちに法身なりとは考えていないことである。応身でもなく一般大乘教の報身でもない仏身を自受用身と呼んでいるのである。自受用身が三身のうちの法身に当ると明言したのは後世の弘法大師空海である。

真言門が大乗仏教とは違うのだというこうした教判的な理

不空訳經典にあらわれた仏身觀の特色―その二―(加藤)

論づけは、『理趣釈經』にも、『十八会指帰』にも、『不空三藏表制集』にも、あるいは不空訳『菩提心論』にもはつきりうかがえるのであり、善無畏・一行の『大日經疏』と並んで、弘法大師空海による真言宗開創の確固たるよりどころになつていくことになる。

(7) 四種曼荼羅の思想が、不空訳經典ではじめて新しく生まれ変つてゐること。

四種曼荼羅は、仏の相をあらわす重要な論法で、弘法大師空海に至ると、これがいわゆる即身成仏の一つの論証に用いられてくる。

曼荼羅を大曼荼羅、三昧耶、法、羯磨の四つに分類し、しかも、この四曼は互いに渉入し別なものではないという論法は、不空訳の『十八会指帰』『理趣釈經』の二部にはつきり打出されている。例えば『十八会指帰』の第四会で、「金剛藏等の八大菩薩あり、一一の尊おのおの四種曼荼羅を説く。(中略)四種曼荼羅とはいわゆる大曼荼羅、三昧耶、法、羯磨なり」といい、詳しく読んでみると、『十八会指帰』では金剛頂經十八会のすべてに四種曼荼羅が説かれており、これをいいかえれば、金剛頂經では、大乘の多くの仏身を四種曼荼羅で統括し、これを大日如来で統一することをあらわしていると解釈しているのである。だから、『十八会指帰』の結びで次のように述べている。

「(金剛頂) 瑜伽教の十八会、或は四千頌、或は五千頌、或は七千頌、都て十万頌を成ず。五部四種曼荼羅四印を具し、三十七尊を具す。一・一の部は三十七を具し、乃至一尊は三十七を具し、乃至一尊は三十七を成す。また四曼荼羅四印を具す。互いに相い渉入す。帝釈網の珠の光明が交映し展転して無限なるが如し」そして逐には五部も「互いに円融し、如来部即金剛、蓮華部即宝部、互いに相い渉入し、法界即真如、般若即實際(中略)本に於ては即ち一体なり」となるのである。

不空三蔵が四種曼荼羅によつて仏身觀を統一した成果を、弘法大師空海は、仏と自分とは一体であるとするいわゆる「即身成仏」の論証に發展させた結果、

「四種曼荼羅のおの離れず、重々帝網なるを即身と名す⁽⁸⁾」と表現しているのである。

不空三蔵の師、金剛智三蔵訳の『念誦結護法普通諸部』には、求願觀想法を説く中に、息災曼荼羅、増益―、逐法―、降怨―の四種の曼荼羅がみられるが、これらは単なる觀法の四つの方法に過ぎないのである。

(8) 「即身成仏」、「即成仏身」、「即凡即聖」などの訳語は不空訳経典にしかみられぬこと。

即身成仏思想は、弘法大師空海によつて体系化された真言密教の大きな柱の一つである。では弘法大師が「即身成仏」

という表現をどこから引用したかといえは、竜猛菩薩造、不空訳の『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(通称『菩提心論』)からであることは間違いない。則ちその文中に、「けだし真言法の中にのみ即身成仏するが故に、三摩地の法を説く。諸教のなかに於ては闕して書せず」とある。

ところで密教経典を調べてみると、「即身成仏」の語は、不空訳の『如意宝珠輪秘密現身成仏金輪呪王経』に有情決定成仏真言を釈す中、「仏この真言を説きおわつて(中略)重ねて即身成仏の大海印を説く。又、三昧耶印と名づく。もし諸の仏子、即身成仏を得んと欲せばまさにこの觀を修すべし。よく凡夫の父母所生身をして即ち仏身を成ぜしむ」とあり、又同じく不空訳の『宝悉地成仏陀羅尼経』に、「もし衆生あつて即身成仏し、有情を度せんと欲わば、有情と諸仏と平等一相妙智大印を結べ」とある。

又、不空訳『理趣积経』には、「即事即理。理事不相礙故。即凡即聖。性相同一真如也。」とある。

このように、密教経論において、こうした言葉がみられるものは、すべて不空訳であることが明らかにるのである。

(9) 大乘仏教の理論を密教に配当して、密教の新しい理論形成を試みていること。

これは、善無畏三蔵の『大日経疏』にもはつきりうかがえる重要な特色であるが、不空訳経典の中では『分別聖位経』

『十八会指帰』『三十七尊心要』『三十七尊出生義』『理趣経』に特に顕著である。これを挙げれば数多いが、特に仏・菩薩・仏身・仏性に関するものを抽出すれば次の様である。

イ、四摂法（布施、愛語、利行、同事）と四菩薩（鉤、索、鎖、鈴）との接続。

ロ、三聚淨戒（摂律儀戒、摂善法戒、饒益有情戒）と三身（毘盧遮那如来満法界身如々之体、毘盧遮那如来円満報身、釈迦牟尼如来化身）↓断徳、智徳、恩徳との配当。

ハ、六波羅蜜を印・真言・観行に密教化して、「修行者、六波羅蜜印を結び、六波羅蜜真言を誦し、六波羅蜜観門に住せば、即ち一切如来解脱如々智に同ずるなり、法身なり」とする。

ニ、唵摩賀……以下の十七字の密言を十七大菩薩の種子と解釈する。

ホ、梵天並びに七母天の八天を八供養菩薩に配当する。

ヘ、麼度羯囉三兄弟を梵王、那囉延、摩醯首羅の三天の異名とし、更にこの三天は仏法の三宝三身を表わすとする。則ち梵王||仏宝||金剛薩埵、那囉延||法宝||観自在菩薩、摩醯首羅||僧宝||虚空蔵菩薩と配当し、而もこの三者は毘盧遮那の菩提心中より流出するという密教的な解釈をおこなっている。

ト、四姉妹と四波羅蜜（常波羅蜜、樂、我、浄）との

不空訳經典にあらわれた仏身觀の特色―その二―（加藤）

接続。

チ、『理趣経』の「左手作金剛慢印」を新解釈し、「左道左行の有情をして順道に帰せしむるためなり」とする。

リ、卍字は因の義なり、因の義とはいわゆる菩提心為因であることから、一切如来の菩提心を指すという新解釈。

ヌ、十六執金剛神をもつて、一切如来勇健の菩提心所生化なりとする。この部分は『大日経疏』の表現と似ている。

ル、金剛手と一切義成就菩薩との関係を明示している。則ち「一切義成就菩薩とは普賢菩薩の異名であり、金剛手も本は普賢であつて、毗盧遮那仏の二手掌より親しく五智金剛杵を受け灌頂を与えられる。これを金剛手という」とあり、これは、大日如来と釈尊との関係を知る重要な定義になる。

以上述べてきた不空訳經典にみられる新解釈と配当は、後の真言密教に大きな影響を与えるものばかりである。

(10) 「等流身」という訳語は不空訳經典にしかみられぬこと。仏身を四種に分類し、自性・受用・変化・等流とするのは、不空訳の『十八会指帰』と『分別聖位経』（二ヶ所）の二部だけである。金剛智訳の經典にも一ヶ所「等流」の語がみられるが、「等流する」という動詞に用いられたもので、四種身とは関係がない。千潟竜祥博士は、等流身は『入楞伽経』の *nairatnaika* を不空三蔵が命名したものと推論されており、

不空訳經典にあらわれた仏身觀の特色―その二―(加藤)

その点は同感である。しかし、「四種法身」なる語は、金剛智訳と伝えられる『金剛峯樓閣一切瑜伽祇祿經』に一ヶ所、不空訳『宝悉地成仏陀羅尼經』に一ヶ所みえるだけであり、いずれも「等流身」との関係は示されていないところから、不空三藏が四種法身の概念をどう考えていたか不明である。

結語

以上述べたつた不空訳經典における仏身觀の数々の特色を総合してみると、不空三藏の密教純化の努力は、従来考えられてきた以上にはるかに進んだものであることがわかるのである。大乘仏教を超えた真言陀羅尼宗という新しい教えをすでに開き、その仏身觀の違いもかなり理論的に整備されていることがみられるからである。しかし、不空三藏の密教純化の努力は金剛頂經系統だけに限られていること、あるいは、自受用身を強調するものいまだそれが法身大日如来であることまでは明言していないことなど、後の弘法大師空海によつて補足されなければならぬ点も多いのである。

- 1 印仏研究二十三卷一号四十一頁、参照
- 2 大正藏十八・二八七c
- 3 大正藏十九・六〇八b、六一六a
- 4 大正藏十八・二八七c

- 5 大正藏五二・八四〇a、八四五c
- 6 大正藏十八・二八六b
- 7 大正藏十八・二八七a―c
- 8 弘法大師全集①五〇七
- 9 大正藏十八・九〇五c
- 10 大正藏十九・三三三c
- 11 大正藏十九・三三七a
- 12 大正藏十九・六一六a
- 13 大正藏十八・二九五a、二九八b
- 14 大正藏十八・二九六b
- 15 大正藏十八・二九六b―c
- 16 大正藏十九・六一〇a
- 17 大正藏十九・六一六a
- 18 大正藏十九・六一六b
- 19 同右
- 20 大正藏十九・六〇九c
- 21 同右
- 22 大正藏十八・二九八c
- 23 大正藏十九・六〇九b
- 24 大正藏十八・二八七c
- 25 大正藏十八・二八八a、二九一a
- 26 鈴木学術財団「研究年報」5―7

(昭和五十一年度文部省科学研究費による研究成果の一部)